

毎日歌壇

水原 紫苑 選

憎しみがやき疲れ、星たちはつきつきと
身を投げた きれいだ 雲南市 熱田 俊月
△評▽かがやきのエネルギーとしての憎し
みにはリアリティーがある。そして憎し
みに疲れることも。星も人も。

我らいま純びゆく一族なりき隣国の梨ひか
り止まざる 東京 吉岡 耕大

△評▽「一族」や「隣国」が、遠い神話の
世界のように、梨だけが金色に輝いている。

鬼のように金木犀の香の立つて眼窩にさわが
しい鳥がいる 加古川市 石村 まい

真二つに雨粒割れて転げゆく研ぎたての包丁
の試し切り 甲府市 村田 一広

シスターは神を語らず生涯をこの地にささげ
しド・ロを語りぬ 東京 野上 卓

千切れ飛ぶ恋文たちと姉妹です明るい森の
蝶の乱舞は 枚方市 久保 哲也

引力を感じる 星のかたちしたタトゥーに今
日もくちづけをする 盛岡市 立花 塵

軽やかに花が眠っていたのです悪態をつくこ
とも知らずに 岡山市 松井 度

わたくしを憐れいた言葉のいくつもの轍にで
きる泥濘で詠う 川崎市 二宮 珊瑚

ひとりだけ開かぬマトリョーシカの子も我と
おなじく女であって 東京 井山 カナ

伊藤 一彦 選

家系図の前後左右を想像し南瓜と小豆のいと
こ煮を食む 東海市 中山あゆみ

△評▽いとこ煮の語を生かしたユニークな
歌。カボチャと小豆を食べながら、ふと自
分の家系図のいところを思うのが面白い。

眩しさに驚いたまま部屋たちは油圧ショベル
に壊されていく 東京 石川 真琴

△評▽天日に初めてさらされた「部屋たち」
は驚いただろうという新鮮な発想の作だ。

高齢用餌も食べなくなった猫どこかへ去って
姿を見せず 東松山市 奥田 新一

抜け道はいろいろあるよの囁きに私の耳は
堅物だった 白井市 毘舎利道弘

だんだんと妻の口調になって来た娘が並べお
り父の地雷を 東京 風ノ 桂馬

地球から足は離れてひとときの宇宙に触れる
グランジュッテは 宮崎 門田 藍子

プラノドンかつて飛んでたこの街の青空の
青、剥がれかけてる 所沢市 里見 脩一

秋の屋を諏訪湖に向かう街路樹にお日様の
かりんの実り 川崎市 大平真理子

動物が嫌う音を調査する動物学者のころ
の葛藤 倉敷市 中路 修平

あの頃の父母にこの金渡したい今ならできる
親孝行が 袖ヶ浦市 石井 理江

米川千嘉子 選

息を吸うたびに架空の人物の輪郭生まる聖地
巡礼 東京 夏目 そよ

△評▽アニメなどの舞台となった場所を訪
ねるのが聖地巡礼。「息を吸うたびに」が
いい。まさに推し活の醍醐味だろう。

断捨離で知らない事が次々と 子が文学を選
んだ理由 柳川市 広高 信子

△評▽子の昔の作文などが見つかった文学
志望の理由を知る。リアルな断捨離の歌。

をこらも子こらも日傘もつ時世さらなる
熱波に何もつわれら 伊丹市 岡本 信子

割引のシール貼ってるものを取る見栄や外聞
かなぐり捨てて 盛岡市 舟山 治男

マンションに八玄閣までVの規則あり抱かれ
たる大らロビーを通る 横浜 大建雄志郎

おふとんに身体をこする大みたく歌集抱えて
なじむ秋の夜 松戸市 渡邊 理紗

『老いの歌』に作歌の意欲湧きにけり著者は
逝きにし七十路前に 幸手市 中村 早苗

大切なことほどなぜか我々は英語に変えて話
し始める 宮崎 門田 祥子

同世代トークは最初盛り上がり最後は静かに
傷ついている 国立市 佐藤 建

花の名はキバナサフランモドキと知りわれはた
めらうモドキと呼ぶを 大阪市 鈴木 雅子

加藤 治郎 選

堤防で釣れない釣りを続けたらだんだん幸せ
になって帰る 名古屋 森本 有

△評▽釣れないときはふてくされたりする
ものだが私は幸せを感じる。状況を受け入
れる心なのだろう。帰るが少し苦い。

ろくそくの姿が消えてしまいうまで見ていたか
ったバスデーケーキ 津市 川原田明子

△評▽吹き消されたのだ。ろくそくを姿と
歌う。誕生日をいとしむ思いが感じられる。

空間も時間もふくらむなんてこと、後ろ姿で
教えないでよ 東京 境 千尋

私(ではなく経理部の中堅として)の意見を
申し上げます 東京 栗生 翠

「いい人」と言われた真意が掴めない満員の
エレベーター見送り 東京 畑 えな

記憶からいずれすべての音が去り優しい色の
恒星になる 大津市 世田 夏雪

花を抱くように眠って手も繋ぐ 愛はいいか
ら夢は許して 西宮市 荒川 裕香

世界地図の形の雨後の水たまり一人の幼児が
形を変える 横浜 斎藤 博道

ひかたら消えてしまふと思うからきみはこん
なに今日もきれいだ 春日井市 月夜の雨

真横から夕陽差し込む部屋に暮らす手の中に
居るといふ感覚 柏原市 類家 有二

投稿規定

はがき1枚に
選者を指定し、
未発表の自作を
2首・2句まで。住所、氏名、年齢、
職業、電話番号を明記し、宛先は
〒100-8051(住所不要) 毎日新聞
学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選
者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投
稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けて
います。

他媒体との二重投稿や、同一作品
を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削する
ことがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メデ
ィアやデータベース、アプリ「俳句
てふてふ」で公開し、本社が作成また
は許諾した出版物やメディアに掲載
することがあります。